〔研究ノート〕

土佐派絵師列伝③　土佐行広（ゆきひろ）

―多彩な活躍、「土佐」ブランドの確立―

藤原行光に始まる土佐派は、次の世代で二つの流れに分岐しました。兄・藤原光益は足利義満の御用絵師として活躍、出家後、六角寂済と称し、六角絵所を主宰しました。弟・藤原光重の作例は現存しませんが、寂済に次いで絵所預に就任したようです。この光重の子と考えられるのが藤原行広です（系図参照）。行広は土佐守に任ぜられたため、「土佐行広」と称されます。

（系図）

藤原行光 ┬六角寂済
　　└藤原光重―土佐行広

近世の画史類には、「土佐」を称する絵師が平安時代から存在したかのごとく記されることも多いのですが、絵師名としての「土佐」の初出は、応永13年（1406）10月29日、この時、土佐行広が山科教言（のぶとき）夫人の肖像を描いたという記事ということになります。ここで、行広の主要な画事を列挙してみましょう。

応永13年（1406）10月、山科教言夫人像、文車の絵様を描く。
応永14年（1407）5月、扇絵を描く。
　同年　6月、「妙音天像」（仁和寺蔵）を描く。
　同年　8月、直垂絵を描く。
応永15年（1408）6月、「足利義満像」（鹿苑寺蔵）を描く。
応永21年（1414）、清凉寺本「融通念仏縁起絵巻」を描く。
応永35年（1428）、足利義持の臨終に際し肖像を描く。
永享元年（1429）12月、崇光院三十三回忌の本尊「阿弥陀三尊像」を描く。
永享6年（1434）3月、「満済准后像」（醍醐寺蔵）を描く。
　同年　4月、真言祖師の像を満済のもとに持参。
永享7年（1435）6月、六角絵所とともに満済追修の両界曼荼羅を描く。
宝徳3年（1451）、「涅槃図」（興聖寺蔵）を描く。

このうち、応永35年までの記録には「土佐将監」とあり、永享元年以降は「土佐将監入道」などと記されますので、この間に出家したものと思われます。また宝徳3年に制作された興聖寺蔵「涅槃図」には「土佐守入道法名経光筆」との自筆落款（図1）がありますので、法名を経光と称していたことも知られます。このように、出家入道の前後あわせて半世紀近い活躍と、比較的多くの遺品に恵まれる行広は、室町時代の土佐派を考える上で極めて重要な存在といえます。

制作領域は肖像画や仏画だけでなく絵巻や扇絵など幅広く、さらに直垂絵や文車（書籍を運搬するための車）の絵付けなど、工芸意匠的な分野にも及んでいます。中でも注目されるのは、肖像画の制作です。上に挙げた中には、山科教言夫人といった公家や、将軍足利義満・義持、醍醐寺の満済という僧侶、さらには真言祖師の影像という遥か過去の人物までもが含まれ、これが行広の得意分野であったことは明らかです。そして義満・義持両将軍の葬儀や年忌供養に使用される肖像の制作からは、行広が将軍家の肖像画に関して御用絵師的な存在であった可能性も指摘できます。ここで問題なのは、前回、義満の御用絵師として紹介した六角寂済との職制の違いです。行広・寂済はいずれも将軍家や醍醐寺など、土佐派の祖・藤原行光以来の基盤に則った活動を展開していますが、義満没後に寂済が七回忌で用いる仏画を描いたのに対し、行広が肖像を描いていることからは、両者の棲み分けがあったことをうかがわせます。こうした状況から、二つに分岐した土佐派は、このころ共存共栄を謳歌していたように感じられます。

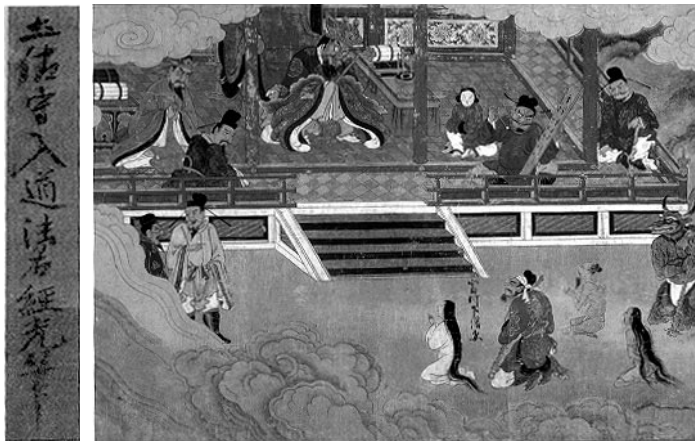
さて、土佐行広の活動でもうひとつ重視したいのは作品に落款を入れている点です。前述の興聖寺本（図1）のほか、山口県防府市の国分寺に所蔵される「涅槃図」にも落款があります。前者は朝廷関係の、後者は周防の有力守護大名大内氏の注文によると思われますが、中央の権力によるお墨付きと、大内氏の如く中央の文化に憧れる地方大名（といっても大内氏は日明貿易で巨万の富を得る別格的な存在ですが）による需要という二つの要件からは、行広の名だけではなく「土佐」という絵師の家が一種のブランドとして認知されていた可能性を示唆します。行広以前に、やまと絵師自身による落款のある作例はほぼ皆無であることを考えるならば、彼の日本絵画史における存在価値はきわめて重要であるといえます。

さて、こうした行広の画風はいかなるものでしょうか。清凉寺本「融通念仏縁起絵巻」の行広担当段（図2）を見ると、前回触れた六角寂済が金銀泥を多用し、形態の奇矯性を指向していたのに比べ、形態・色彩ともに温雅な風情を漂わせ、人物の表情は中世前期のやまと絵とは異なる親しみやすさを感じさせます。一方、肖像画においては、細く繊細に引かれた墨線で像主の人間性までも浮かび上がらせる顔貌、その威厳を強調する張りのある衣服の輪郭線など、同時代において傑出したものを持っています。さらに、仏画ではこの時期通有の明るい色彩と明確な形態を示しつつも、俗に流れない気品を感じさせてくれます。

藤原行光に始まる土佐派は、三世代を経て行広に至り土佐を称し、その様式や職制、制作領域など様々な点で一定の確立をみたということになります。　（高岸輝）

（図1）「涅槃図」（興聖寺蔵）落款

（図1）（図2）「融通念仏縁起絵巻」（清凉寺蔵）下巻第8段



季刊 美のたより №149
平成17年1月5日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.